〇まとめ

今年度の調査により、瓦窯操業時のものと考えられる瓦組み暗渠の、端部とみられる箇所の排水構造や、大寺山地区北側の下段平坦面における遺跡の実態が明らかになりつつあります。

大寺山地区においては、瓦窯がある南半や、礎石建物跡がある北半上段平坦面に遺構が集中する一方で、北端付近においては遺構密度が希薄であり、瓦窯操業時は大寺山地区の斜面上部や南半といった、比較的標高が高い部分で人の活動が行われていたことがわかってきました。

今後、史跡指定範囲内においてこれまでに確認できた遺構の分布や原地形などを整理し、遺跡内の当時の土地利用の状況を考察しつつ、来年度も瓦窯の調査や史跡指定範囲内の遺構の構成や分布、関係性などを明らかにするための調査を継続して行う予定です。

西暦	和暦	事　　項
1180	治承四	源平の争乱で東大寺が焼ける。以仁王が平氏追討の令旨を発する。源頼朝が挙兵。
1181	治承五 養和元	重源、造東大寺勧進職に任命される。大仏の螺髪を鋳始める。 平清盛が死去（64 歳）。
1185	元暦二 文治元	「壇ノ浦の戦い」で平氏が滅びる。 東大寺大仏開眼供養。
1186	文治二	周防国が東大寺造営料国となる。翌年より、杣から木材を切り出す。
1187	文治三	源頼朝、東大寺復興の木材運搬を妨害しないよう周防国の地頭に命ずる。 この頃、周防阿弥陀寺創建。重源、備前国荒野開発の妨害停止を奏上。
1190	建久元	東大寺大仏殿上棟。
1192	建久三	後白河法皇が死去。播磨国大部荘を東大寺領として復興し、播磨浄土寺を建てる。
1193	建久四	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる。
1195	建久六	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。重源、大和尚号を得る。
1196	建久七	魚住泊・大和田泊の改修計画が認められ、国衙に協力が命じられる。 東大寺大仏殿の石の脇士像、四天王像、中門の石獅子などがつくられる。
1199	正治元	源頼朝が死去。
1203	建仁三	『備前国麦進未進納所惣散用帳』に万富産の瓦を示す「吉岡御瓦」の語句あり。 東大寺総供養。 重源、『南無阿弥陀仏作善集』作成。翌年、東大寺東塔の造立を開始。
1206	建永元	重源、東大寺浄土堂で死去（86歳）。

表１　東大寺再建関係略年表

図版出典

図 6（羽釜）：日本中世土器研究会 2003
『第 22 回中世土器研究会シンポジウム 中世土器研究の今日的課題―土器編年と中世史研究―』日本中世土器研究会

図 2,4,6（軒平瓦）：瀬戸町教育委員会 2003
『瀬戸町埋蔵文化財発掘調査報告 1 史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告』瀬戸町教育委員会　より一部改変

2026. 10　一部改変

国史跡　万富東大寺瓦窯跡
発掘調査現場公開資料

令和 8 年 2 月 28 日（土）　於･万富東大寺瓦窯跡（発掘調査現場）
岡山市教育委員会・岡山市埋蔵文化財センター

史跡万富東大寺瓦窯跡の概要

国史跡万富東大寺瓦窯跡は、岡山市東区瀬戸町万富に所在しています。この遺跡は、約 850 年前の鎌倉時代初頭、源平合戦の一場面である治承４（1180）年の「南都焼き討ち」によって焼け落ちた東大寺の再建のため、俊乗房重源が主導となり瓦を焼いた窯跡として著名です。昭和２（1927）年に史跡指定を受けました。遺跡は、大寺山地区と上の山地区に分布し、昭和 54(1979）年に岡山県教育委員会、平成 13・14（2001・2002）年に瀬戸町教育委員会によって発掘調査、科学探査が行われました。その結果、瓦窯や礎石建物跡、灰原など関連する遺構の存在が明らかになりました。

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では、瓦窯の規模・形態や史跡指定範囲内の遺構分布状況など、将来的な史跡整備を見据えた遺跡の情報や性格の把握を目的として、令和 3 年度から継続して範囲確認調査を実施しています。調査では、既往の調査との整合性を確認しつつ、指定範囲内の詳細が不明な地点の発掘調査を行い、遺跡の全容把握に努めています。これまでの調査の結果、大寺山地区に 15 基の瓦窯が存在することや、その規模・形態などの瓦窯の詳細なデータが明らかになってきました。また、礎石建物跡についても再検討を行い、「仏堂」としての性格が考えられるようになりました。

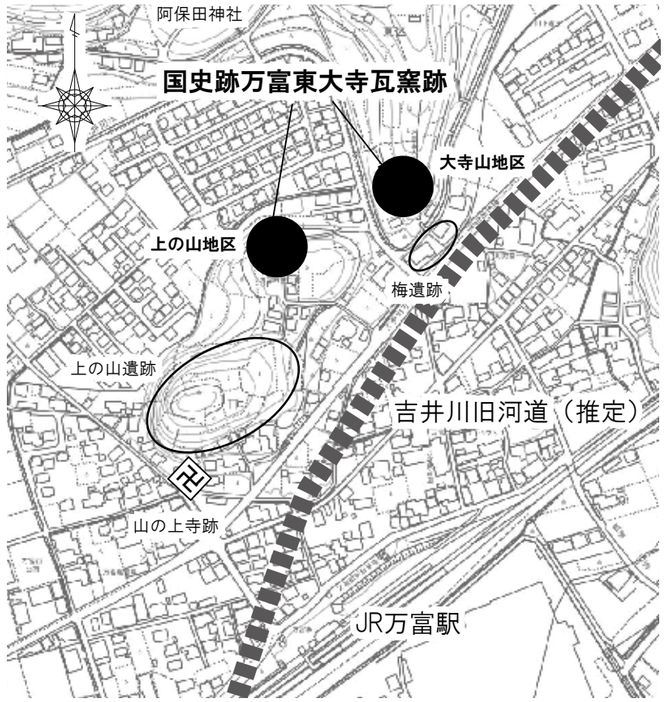

図１　万富東大寺瓦窯跡と周辺の遺跡

令和７年度調査成果

今年度は大寺山地区北側に５つの調査区を設定し、調査を行っています。調査区は、用水路のそばの一段低い平坦面に第 12 トレンチ、その一段上の平坦面に南から第 13 トレンチ、第 16 トレンチ、第 14 トレンチ、第 15 トレンチの順に設定しています。

〇第 12 トレンチ

瓦組みの暗渠を再検出し、未調査部分の遺構の把握･再検討をするために設定したトレンチです。

瓦組み暗渠（図２）

完形品の平瓦の凹面と丸瓦の凹面を組み合わせて管状につないだ排水施設で、瓦窯操業時のものと考えられています。今回の調査では、瀬戸町の調査時に検出された東西方向にのびる暗渠を再検出し、さらに西側へ追いかけ、西端とみられる地点を新たに検出しました。この地点では、管状になる丸瓦と平瓦の下に、さらに別の平瓦が角度をつけて据えられていることが確認できました。管から出てきた水を一旦平瓦の凹面で受け、斜面裾に向かって排水するという、暗渠の排水構造が想定できます（図３）。

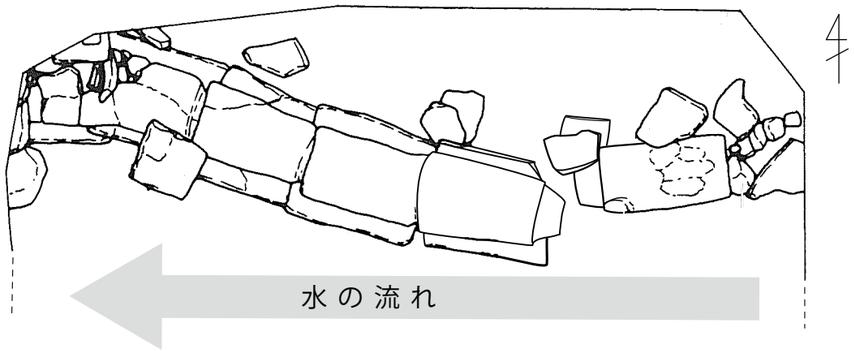

図２　瓦組み暗渠簡略図

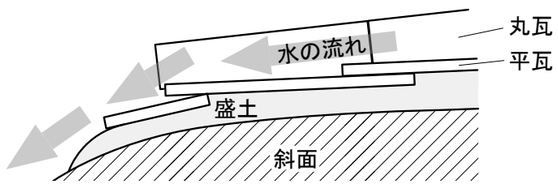

図３　排水構造のイメージ図

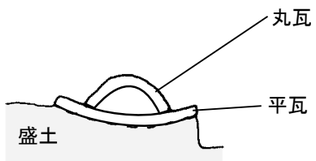

図４　瓦組み暗渠断面のイメージ図

岡山市教育委員会広報専門官「こらぼん」

暗渠（あんきょ）ってなに？？

地中に埋めたり、おおいをしたりして、
水面が見えないようにつくられた溝のことだよ。

〇第 13 ～ 16 トレンチ

大寺山地区北側の下段平坦面における､遺構の分布状況を把握するために設定したトレンチです。遺構がほとんど検出されず、瓦窯操業時の人の活動痕跡を見つけることはできませんでした。各トレンチの壁面では、地山を切り崩し盛り土として使用した黄色い土や、窯から排出された瓦片・土器片、炭や煤を含む、灰原に由来する暗い色の土（灰原二次堆積土）などを何層にも積み重ねた、土の堆積状況を観察することができます。

第 16 トレンチの北東部では、石を含む瓦溜りを検出しました。平瓦片や石に混じって軒丸瓦の破片も確認できます。これらの瓦は、12 世紀末の瓦窯や 14 世紀の土器窯に伴う灰原の土を利用した二次堆積土の上層に位置するため、少なくとも 14 世紀以降のものと考えられます。

図５　遺構配置と今年度の調査区

＜出土遺物＞

瓦窯で焼かれた平瓦や、土器窯で焼かれた須恵質の碗・擂鉢、土師質の甕・鉢・羽釜・羽釜の脚などが出土しました。ほかに、土錘や近世のものとみられる陶磁器片も出土しました。

第 15 トレンチの北壁の下部では壁に刺さった状態の軒平瓦片が、第 16 トレンチの北東角付近では床面で軒丸瓦片が確認できます。是非探してみてください。

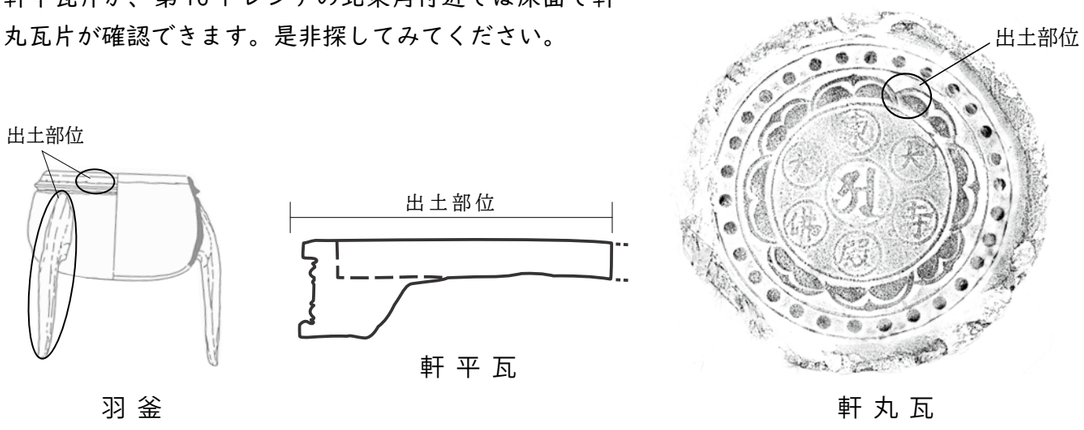

図６　出土遺物イメージ図